

〔物語〕 関東大震災からの復興と築地小劇場の興起―小山内薫、土方与志、男優陣および女優陣―

第三節 大震災による新劇人の衝撃と覚醒 その一

激震の直撃市川左団次く新劇の震災と復興理念く坪内逍遙震災教訓く絶望する小山内薫
く帰国の決意土方与志く人生の劇的転換東山千栄子く震災の渦中で山本安英く家屋の下敷
き及川道子く震災日記秋田雨雀

関東大震災は首都の興行施設を壊滅させ、新劇に係わる人々やその留守宅をも直撃した。小山内薫とともに自由劇場の公演を遂行し、新劇勃興を先導した市川左団次も、公演を前にして大地震に襲われ、自宅から上野、滝野川、東中野へと避難する。

大地震の衝撃と避難（市川左団次著『左団次芸談』）

（大正）十二年は六月の明治座を了えてから、九月は歌舞伎座に出演することとなった。
その九月一日である。午後一時から岡本綺堂氏作『鬼薙清吉』の本読があるので、まだ家にいると午前十一時五八分、関東一帯を襲ったあの大地震である。―土蔵の瓦が一、二枚落ちて、塀が少し倒れたきりで、大したこともないので、落ちついていると、そのうち下町に異様な光を発する火の手が見えた。（猫いらず）

の本舗だと云う。間も無く猿楽町の方から火が上ってきたと云う騒ぎ。大丈夫だと思っていたものの、女達がいいたので、とにかく立退くようにと云い渡して、弟子達に荷物を頼み、妻の姉の上野の家に引上げた。私の家の辺は被害が殆ど無かったので、近所の人はまだ立退く気配も無く、私の家の者が一番早かったようである。

すると二日の晩になって、上野の山に火が廻ってきたというので、山の上は大騒乱を極めた。これは避難の人で山が一杯なので、後からきた人達が仕方なく、日暮里の方に続々と行くのを、山から逃げて行くものと誤っての混乱と後になって知れたが、私達も線路を伝って、滝野川の知人の家に移った。するとまた、朝鮮人云々の噂が近隣を騒したので、その知人の妹の家が東中野にあって、田舎の物持の娘でそこならば米も豊富に得られると云うので、自動車を一台見つけて、東中野の某家に落着いた。ところが先方は夫婦暮し、こちらは同勢七、八人で、なかなか米が足りないらしいのが解ってきて、気の毒になったので、私の車夫に米を採させて買ってこさせなどしているうちに、牛乳配達が中野野方村に家を見つけてきてくれたので、七日にそこへ引移った。まだ建てたばかりの家で、障子も張ってなかったが、結局その方が涼しいと云って、一カ月もそこに起き伏しをしていた。

東京で芝居を演ることは、まだ一年位は覚つかないと思っていたので、当分はそこに籠るつもりでいたところへ、大阪から話があったが、それは断ると今度はたしか十月の二日に京都から話があったので、十一月には京都で演らうということになった。

ちょうど小山内君は大阪に引移るというので、一緒に行くことにして、東海道線はまだ復旧されていなかったもので、上野から十月二一日に発った。汽車の中は大混雑で一睡も出来ず、おまけに親不知のあたりで、

夜二時頃に半時間近くも停車してしまったので、小山内君と車外に出て、名月の荒磯を歩きながら、灰燼と化した東京のことを語りあった。・・・

震災では貴重な書籍や書画骨董を灰にしまったが、立退く時には自分のものだけが焼けるので、また直ぐ集るといふ気がしていた。岡本綺堂氏も震災後一時麻布に住まわれていたが、その話をするときやはり同じような気持であったと語られた。中野に落着いてからは、ことによると蔵だけは残っていて、そのもののは無事かも知れぬという気もしていたが、十日程経って行ってみると、やはり跡形もなかった。①

帝国劇場における自由劇場の公演が杜絶したあとも、市川左団次は活躍を続け、大正九年には新富座で岡鬼太郎作『今様薩摩歌』を、また歌舞伎座で中村吉蔵作『井伊大老の死』に出演した。さらに大地震の前年京都南座での公演に先立って、十月一日洛東の知恩院山門前で野外劇、松居松葉作『織田信長』が演じられた。松竹大谷社長の後援により左団次が主役を演じ、祇園花街の少女五十余名が稚児姿で舞い、小山内薫も演出に参加した。無料で提供されたこの野外劇には観衆十万人が押し寄せたとされる。②

大地震の翌年六月に刊行された改造社編『大正大震災誌』には、演劇の分野に関して河竹繁俊の論稿「歌舞伎劇に及ぼせる影響」とともに、戯曲家中村吉蔵の執筆「破壊前後の新劇」が収録される。この寄稿において中村

① 市川左団次著『左団次芸談』一五六―一五九頁。

② 市川左団次著『左団次芸談』一五二―一五六頁。

は劇壇震災の概要を誌したあと、営利主義を排除した新劇復興の理念を提起している。まずは演劇の壊滅を要約する前半につきを示す。

中村吉蔵「破壊前後の新劇」（改造社『大正大震災誌』）

大正の大震災は帝都のあらゆる文化機関を片っ端から破壊し去ったが、その中でも殆んど字義通り破壊し尽されたのは劇場である。劇場が直に演劇の成立に必要な欠くべからざる条件であり、機関である以上は、それが破壊し尽されたといふ事は、演劇が一時的に滅亡した事になる。・・・さし当たり、震災前に漸く勃興して来て我が国の在来の歌舞伎劇に挑戦を試みつつあった新劇の過程と、今回の破壊に基づくその当面の影響とを一瞥しよう。

元来新劇とは旧劇、即ち徳川封建期の遺産たる在来の歌舞伎劇に対して、明治大正以後の新時代の精神を基調とし、西欧の近代劇の感化影響をその内容の上にも、又その形式の上にも著しく反応した新作戯曲の演出を意味するものであるのは云うまでもないが、西欧の近代劇の第一期が、主として自然主義乃至写実主義派の心理的解剖を重んずる傾向のものであって、従って小劇場形式の芸術であった如く、我国に起った新劇運動も亦多くはさうした趨勢を追うて、小劇場形式の芸術を打建てるための努力が続けられて行った。ところが在来の歌舞伎劇の大規模な芸術様式に適合すべく作られた所謂大劇場の、あの龐大な建築はこの種の新劇にあまり適合しているとは云へない。唯洋風建築のプロセニウム舞台を持った帝国劇場と、さらに西洋の中小劇場の建築様式をそのまま移植して来た有楽座とだけが、新劇の演出に最も適合していた。殊に有楽座

が独特の壇場だったと云ってもよく、事実にも新劇の発祥地となった記録を作っている。

この有楽座の建築せられたのは明治四一年十二月で、在来の興行師の企業欲から離れて、華族富豪の有志者が新しい演芸を起さうとする多少の理想的計画のもとに成立ったものである。この劇場に於て明治四二年十一月小山内薫と左団次の自由劇場が、森鷗外訳のイブセン劇『ボルクマン』を上演して、西洋近代劇を初めて我國の劇界に紹介し、従来の新劇のために第一の烽火を挙げたのは、當時の一センセーションであった。その後数回自由劇場はこの舞台を利用して数種の西洋近代劇を試演すると同時に、新進の劇作家、秋田雨雀、長田秀雄、吉井勇等の創作戯曲をも紹介した。・・・

有楽座に次いで、若しくは相並んで新劇の為に相當の功績を残したのは帝国劇場である。同座は明治四二年の創立でルネッサンスの建築様式に則り、白煉瓦の巨大な樓閣を外濠に近く聳立させて帝都の一大美観であったが、プロセニアム舞台を持っていただけに、他の日本式大劇場の、舞台の間口のムヤミにだだ広いのとは異つてその間口八間、奥行九間、プロセニアムの高さ四間、定員千六百三人であった。この舞台で文芸協会の『人形の家』が始めて公演せられ、松井須磨子が我が国最初の女優たる事を認められたのは明治四四年十一月である。・・・今回の大震災はそうした記念の舞台を焼尽したが、外郭はそのままに残つてゐて、近く再建される筈である。その意味では有楽座の喪失に比べれば、我々の遺憾の度は幸に少ないと云わねばならない。

又歌舞伎座は日本式大劇場の或意味で模範的のものであったが、震災の二年前に失火して全焼した。一、二の例外を除いて新劇には殆んど縁がないが、大劇場形式の新劇發生の一基点と見る時には、大正九年五月坪内逍遙の新史劇『名残の星月夜』を上演し、次いで七月に自分の創作した『井伊大老の死』を上演してい

るのは記憶すべきものであろう。新築中に起つた震災の被害は比較的輕かつたようであるが、こんどのは舞台間口十六間の設計と聞いては、今後の大劇場形式新劇場が果たしてそれに適合する可能性を持ち得るのか否かは相當の疑問である。猶この他に明治座、本郷座、市村座に浅草の公園劇場、三国座等の中には新劇運動と因縁があるものもあり、またそれぞれに新劇が旧劇若しくは通俗劇と雜居して、そこに多少の分布地図を描いていたが、震災のために悉く灰燼に帰し去つた。これは一時的にも旧劇に対する大打撃であるが、同時に新劇に対しても亦相當の損害であるのは勿論である。・・・

我國に於ける新劇の第一期、即ち近代劇運動時代に於ては、ひたすら純芸術的な新劇の爲めに途を拓かんとする熱意と期待とに燃えて、そこに全力的な戦いが戦われたのであるが、それが途中で所謂民衆化の傾向へ転回して行つた為に、必然に商業主義化されて来て、やがて創作劇が普通の営利劇場へ迎へられて行くに都合の善い段取が付いたと同時に、創作劇そのものの半面には不純分子が鼠入する動機が醸されて、近代劇運動の当初の理想的な出発点とは距離があり過ぎるといふ批難が一部から加へられているが、それも強ち無稽の言として斥ける事はできない。・・・新劇がそうして普通興行に割込んで行つた結果、帝劇や有楽座は暫く別として、日本式の大劇場の大舞台の上に、本来小劇場形式の新芸術が一時の間借り状態で、落着かない状態で雜居者の如く取扱われねばならなかったのは、敏感な鑑賞家の眼には一の醜態として映じたかも知れない。それだけならまだ宥されもするが、他の全く芸術のテンペラメントの異つてゐる歌舞伎劇などに混入して演出される点では、折角の新劇をして寄席興行の余興扱いさせる遺憾がないとは云えなかった。その根源は即劇場の商業主義から来ていると云へば、それはたしかに誤りのない真理である。・・・

上演されつゝあつた新劇の内容、基調精神の問題に到つてはここで手輕に一掃的の論断は下されないが、

その多くは自然主義乃至写実主義の範囲に止まり、若しくは一種の唯美主義に低廻していたと云っても大過はない。勿論近代劇運動の主潮の一はそこに關っているが、今全世界の実生活の地盤を震撼しつつある最も現実的なブルジョア対プロレタリアの抗争から捲起された思想感情の激しい渦巻、その渦巻のためにやがて崩壊して行こうとする錯覚的現代文化の運命、原始的に更生せんとして苦悶しつつある人間の魂の呻めき―そうした世界大戦以後の煉獄に投ぜられた人間の实生活図は、我国の既出の創作劇にはまだよく現われていない。①

島根県で旅館の息子として生まれた中村吉蔵は、公証人の書生や為替貯金管理所の書記を勤めた。苦学しつつ彼は早くから数々の小説を雑誌に投稿し入選する。やがて上京して広津和郎のもとに寄寓し、早稲田大学に入学。その後欧米での留学と遍歴によって演劇への関心を深め、帰国後島村抱月の主宰する芸術座に参加する。大正三年から大正八年にかけて彼の戯曲、『飯』や『剃刀』が帝国劇場で松井須磨子を主役として公演された。②

日本における文学と演劇の近代化を先導した坪内逍遙は、『桐一葉』など新歌舞伎を創作した後、大正期には壮大な戯曲『役の行者』を完成した。この頃からしばしば胃病に悩み、早稲田大学の教壇を離れ、同大学総長へ

① 中村吉蔵「破壊前後の新劇」(『大正大震災誌』改造社、一九二四年。)一七六―一八〇頁

② 大山功著『近代日本戯曲史』第二卷(大正編)四八〇―四八一、四八五―四九〇頁。

『新人物立志伝―苦学力行』大日本雄弁会、一九二二年。五四―六六頁。

の就任も固辞。大地震の年四月まで熱海で静養した坪内は、八月に岐阜から志摩を巡り帰京していた。① 震災に關する逍遙の論述はかなり長文にわたるが、これを文明是正の好機とも判断し、自作『役の行者』にも言及しつつ、自然と人間の融合・調和を希求するのである。

坪内逍遙「大地震より得たる教訓」(『逍遙全集』第十卷)

今度の大地震災はわが建国以来の最大厄で、全国民の大不幸、大損失ではあるが、めいめいの覚悟次第で、この禍いを転じて幸いとなして、却ってこれを新日本興隆の機縁とすることも出来る。そうしてそれは、主として今度の天災に対するわれわれの観察と態度とによるのである。

常識的に観れば、今度の地震は前古未曾有の、殆ど世界の史上にも先例のなかった程の大災だというに止まるが、あるいはやや皮肉に、かえって一種の天幸であったのだと観る見方もある。或いは天譴だと観る者もある。東西内外ともに昔から何か大きな災厄が起ると、それを神または天が人間の不埒を憤るあまりに降す懲罰と解する例がある。現に明暦の大火や安政の大地震の際にもそういう観察をした者がかった。・・・

災前のわが国は、ある一部の人々には、噴火山上にあるものとししばしば評されていたくらいで、何等の大破裂によらない以上は、どうすことも出来ない程度に行き詰っていた。政治、社会、其他、公私一切の団体に、個人生活に錆び付いた鉄糞のように固着していた情弊や因習は、何等かの未曾有の破壊力を待たなければ

ば取除かれさうに思われなかった。かの世界的大戦争から無損害で浮び上がったのはわが国の仕合わせだったが、それが為に国民の大多数が成金根性になって、射倖と虚栄とで浮ッ調子になって、目前の私利私欲にばかり耽り、驕奢、荒淫をほしきままにしていた。ところが今度の大震災はそういう悪弊のために靡爛し切っていた日本を、首都東京を代表せしめて、一挙に之を微塵となし、社会的に大死一番せない以上は、如何ともすべからざる程度に行き詰っていた局面を打開し、浄裸々の原真に帰らしめようとしたのだと観れば観られないこともない。実に今は世界の大過渡期であり、人間そのものの大改造期である。……

今の人間は自然に随循して生活しているものだとはいえない。彼等は無理に海川を埋めてそこに住宅地を拡げる。縦横に山腹を掘り穿ってそこにトンネルを通ずる。処かまわず摩天楼を築き上げる。山林を濫伐する。夜を昼にして不自然な労務を続けたり、不自然な遊びに耽ったりする。不自然な飲食物や嗜好品や麻醉性の薬剤を製って口腹の欲を欲しいままにする。或いは男女の性的関係を一種の遊戯扱いにする。……

もし自然がエホバの如き、もしくはジューピターの如き人格神であつたなら、この人間の不従順を、無礼を、僭越を、暴戾を憤激し赫怒しないではおかないであらう。その昔、役の行者が葛城山から金剛山へ磐橋を架そうとした時、あらゆる山の神共を駆り集めて之にその労役を課したところ、一言主という神だけがその命を奉じなかつたので、之を石室に呪縛したという伝説がある。それをかつて作の骨子にして、わざと筋を変えて『行者と女魔』という一脚本を作つたが、それによると一言主は行者のために先年楠に身動き出来ぬように呪縛されて、何十年という間呻き苦しんで、行者を呪い罵り機会さえあれば、呪縛を破つてあばれ出して、行者及び人間に復讐をしようとしている事になっているが、それは人間の智慧に呪縛されて余儀なく虐使されている自然力とても、よし意識はなく、意志はなくとも、もし人間の所為が余りに自然の法則に逆戾

するようだと、恐らくいつかは大報復を試みる時が来るだろう、ということを比喻したのであつた。……

自然に随順しつつ営む和衷協力的生活！それがもたらす貢献！それがわが日本の復興期の文化であらねばならぬごとく、それがまた世界の新文化の主たる要素であらねばなるまい。世界列国は今や十九世紀以来の、全く空前の人間生活の大発展、大拡張によって、かえって比隣の如く相接近するようになったために、四海同胞の、昔は白昼夢と思われた理想も、いまはこれを現実となし得べき機会が比較的得易くなつてきた。・・われわれはすべからず今度の大災に教えられて、内外の自然を虐使したり拘禁したりしないで、馴致し、善用し、かつつねに相愛、相助の和衷協同の生活を営むことにその最善の努力を致し、よつてわが日本の新文化に、また世界の新文化に貢献すべきである。①

大地震勃発のとき小山内薫は、家族とともに関西に滞在し、東京四谷の留守宅も被災を免れた。新劇再生の悲願をなお秘めて、ときを待つ小山内の心境を震災の惨禍は一層沈痛にした。演劇界の伝統と傾向に失望した小山内薫は、その後松竹キネマの研究所所長として招かれ、わが国初の劇映画『路上の靈魂』を軽井沢で撮影する。しかし、大正十二年の春松竹経営陣との紛糾もあつて、すべての興行と劇団から離れ、書斎での演劇研究に専念していた。

大地震直後の苦衷（小山内薫「築地小劇場建設まで」）

私が昨年の三月、松竹と手を切った時―それは私が日本の営利的劇場の総てに対して望みを絶った時でした。私は再び日本に於ける営利的の劇場には如何なる關係に於いてもはいつて行くまいと決意しました。當時の私にとって「前途」はありませんでした。目の前は闇でした。私は唯書いて、僅に生活し、僅に自分を慰めました。

その内に私の思想の上に或黎明が来ました。それは独逸へ行っている土方が帰って来たら、二人で演劇学校を興すことでした。勿論この考えは余程前から私にありました。営利的劇場と全く絶縁するに及んで、もうこれより外に自分の行くべき路はないと思うようになったのです。

物質上の根柢があつたのでもありません。組織上の同志があつたのでもありません。私は唯ぼんやり―併し強い希望を持って―土方が帰って来たら、二人でそれを始めようと思つていたのです。そしてそれを楽しんでいました。その考えは誰にも知られずに私自身を慰め且つ励ましていました。

大地震が来しました―その時、私は家族を挙げて地方にいました―東京の殆んど総ての劇場は焼け亡びてしまいました。私の心の中で半年前に亡びてしまつていた総ての劇場は目に見ゆる形の上でも亡びてしまったのです。

併し総ての劇場が亡びると共に私自身の希望も亡びてしまひました。演劇学校の建設などはもう当分思ひもつかない事になってしまひました。少くとも十年のギャップが私の目の前に口を開いたのです。私にはも

う自分の生きてゐる間に自分の進まうとする道が一步でも歩けるか、それが疑わしくなつて来ました。第二の絶望が来たのです―しかもその絶望は私にとって最後の絶望でした。

私はその儘地方にいました。その儘東京へ帰りませんでした。私の友人は私が東京を見捨てたと言つて私を罵りました。だが私はその時東京を見捨てたではありません。私が若し東京を見捨てたとすれば、もう半年前に見捨てていたのです。私はもう半年前に東京の劇団を離れてゐました。東京の劇団はもう半年前に私を追ひ出していたのです。東京の劇団はもう私を必要としていなかったのです。もう私は何処にいいように好い体になつていたのです。

私は何を罵られても黙つてじつとしていました。実際それについて一言の弁明もしませんでした。一言一句も書きませんでした。そして死よりも暗い絶望を抱きながら、黙つて静に毀れた東京を見ていました。震災後の東京の劇壇―すべてが亡びすべてが新しく生まれて来なければならぬ劇団―そこから生まれて来たものは果してなんでしょう。

営利劇場の基礎もない競争的宣伝、劇場の全滅を好い事にして、そこそこに首をもたげた忙しげな新劇団、バラック俳優、バラック演技、バラック興行師、

私はいよいよ絶望しました。もうどうにも救いようがないと思ひました。ひねくれた自分の根性かも知れません。徒らな反抗的精神からかも知れません。私は唯読んで書こうと思ひました。書いて読もうと思ひました。如何に叛かれても憎む事の出来ない演劇を、せまい書斎の内に、それよりも狭い自分自身の頭脳の内

に作り上げようとなりました。①

小山内薫はひととき帰宅して、彼は東京の惨禍を見詰め、大阪への転居を決意する。次男宏の嫁小山内富子による評伝では、留守宅の無事と大阪での暮らしも語られる。

大阪への小山内転居（小山内富子『小山内薫―近代演劇を拓く』）

大震災のその夏、薫の三人の子供と登女子は、薫の大阪での仕事に便乗して夏季休暇の避暑地を神戸の六甲に選んでいた。四谷の留守宅には書生と女中と姉の礼子が残っていた。三男の喬は小学校の一年生で次男宏も、長男徹もまだ小学生であった。二期期は九月一日から始まる。東京へ帰る準備も整った前日の八月三十一日、三男の喬が突然腹痛を訴えたので、帰京は延期されることになった。ここへ東京周辺は地震で阿鼻叫喚の巷と化したのであった。「あるとき喬の腹痛という偶然がなかったら、私たちもどうなっていたかわかりません」と登女子は災難を免れたそのときの幸運をよく私との話題にした。・・・

薫は家族をそのまま大阪に残して、單身東京へ戻った。一般人の上京は制限されていた。薫は新聞関係の報道員の身分証明書を持参しての一時帰郷であった。

四谷南町の留守宅は崩壊からも火災からも免れ、書籍類も無事であったし、病弱な姉礼子をはじめ書生や

① 小山内薫「築地小劇場建設まで」（『築地小劇場』一九二四年、創刊号。五九―六一頁。）

女中も無事だったことを薫は何より喜んだ。東京周辺は一面の焼け野が原で、冷静さを失った巷には流言飛語が飛び交い、治安も悪く騒然としていた。薫は家族を大阪に足止めさせておき、これを機会にいよいよ書齋に籠る決意を固め、家族も大阪へ引越させることにしたのだった。

天王寺悲殿院町の家への引越し、そこはフラトン社中山社長の持ち家で、明治情緒の漂う大きな洋館だった。部屋数もたくさんあったので、小山内一家が広い二階に住み、階下には妹の岡田八千代と松竹の女優さん親子と、薫の仕事の助手をしていた若き日の川口松太郎が、一部屋ずつを占めて、四世帯が二か所の台所を使って暮らすことになった。①

土方与志の夫人梅子は大正初期の日銀総裁、三島弥太郎子爵の次女である。ヨーロッパに滞在する土方与志の留守宅は被災を免れるが、小石川林町の豪邸へは親族のみならず、近隣の住民百余名が避難した。のちに築地小劇場の運営にも尽力する梅子は、罹災者のため炊き出しや買いものに忙殺される。大地震から派生した危険、朝鮮人騒ぎや亀戸事件をも彼女は切実に感じた。

大地震の被災と救助（『土方梅子自伝』）

与志が発した翌年の秋に私は敬太を連れてフランスへ旅立つことになりました。母はまたあとから来る

① 小山内富子著『小山内薫―近代演劇を拓く』慶応大学出版部、二〇〇五年。一八三―一八五頁。

予定でした。九段の学校も夏休みまで仕事をやめ、船の切符も入手し、すべて準備を完了して九月十日の乗船を待つばかりになりました。しかし、突然この出発は中止せざるを得なくなりました。九月一日におこった関東大震災によって、東京一帯が大混乱に落ち入ったため渡欧どころではなくなったのです。

小石川の家は倒壊や火事の被害はありませんでしたが、その大きな地震は、ふるえ上がるようなこわさでした。家の中には、何時またゆりかえしが起って家がたおれるかもしれないので庭に難を避け、木と木の間に蚊帳を吊って、その中に入っていました。満二歳の誕生日を間近かにひかえた敬太も、無事でほっとしましたが、家の中にあるおもちゃを欲しがって泣くのには閉口しました。第一のゆれは正午頃でしたが、夕方になるとあちこちで火の手の上るなかを、姑の実家加藤家や、叔母の嫁ぎ先の吉川家（もと長州岩国藩主）の人たちが、高台にある私たちの家を頼って逃げて来ました。近所の方々も庭の広い私の家へ避難して来られたので、日頃は家族数の少い土方の家も、この時は百人以上もの人たちが埋まりました・・・

わが家では百人以上もの罹災者に、炊き出しをしなくてはなりません。主婦として私はその中止になって働きました。大急ぎで近所の米屋さんから俵のまま米をとりよせ、おにぎりを作るとともに、祖父母をはじめ、親戚の人たちのおかずも用意しなければなりません。人力車に乗って、本郷にあった当時としては珍しいカンヅメやハムなどを売っている食品店まで買い出しにでかけました。

しかし、その途中が大変でした。道路には焼け出された人たちがあふれ、人力車に乗っている私にかつてどなります。「ばかやろう!」「車に乗りやがってなんだい」「コンチクショオ!」着物着て、すますてやがる、非常時だぞ!」

道端のあちこちの家もこわれたり、焼けくすぶったりしています。引き返したいと思いましたが、主婦として大勢の避難して来た人たちの食事を用意しなければならない、今は自分にとってそれが一番大切な役目だと考え、決心して罵声を浴びながら小石川と本郷を往復しました。片腿をそのまま燻製にした大きなハムやカンヅメをたくさん買いこんで人力車に乗せ、小石川の家へたどりつきましたが、あの時のことを考えると、今でも苦しくなります。

地震や火災が一応収まったと思う間もなく、こんどは暴動が起るとの噂が立ちました。社会主義者や労働者、朝鮮人が火を放つとか、井戸に毒を投げ入れるとか云われ、軍隊がでたり、町の人たちが組織した自警団や、右翼団体が鉄砲や刃物、竹槍などを持って警戒にあたり、ものものしい状態になりました。

大きい家に住んでいる者はうらまれて、暴徒に襲撃されるとの噂も立ちました。私どもの家は爆弾をしかけられるかもしれないと注意され、緊張しました。しかし、これは結局デマで、実際に殺されたのは、労働者や朝鮮人、社会主義者でした・・・与志はこの時、大切な演劇上の先輩を失ってしまいました。ヨ一口ッパに旅立つ前に、強い感動を受けた〈労働劇団〉の主宰者平沢計七氏はこの時、白色テロルのために殺されてしまったのです。大震災の時、平沢さんは純労働者組合の組合長でしたが、組合事務所のあった大島町で自衛団をつくり夜警をしていました。三日夜の十時頃、事務所へ帰ったところを制服巡査にとらえられ、亀戸署へ連行されて、そのまま消息が絶えました。

多くの社会主義者、労働者、朝鮮人が警察や軍隊を中心とするテロルや自警団の暴力に殺されましたが、当時は真相を知らされませんでした。平沢さんもその夜亀戸署内で習志野第十三連隊の兵隊によって銃殺されたと、後にあきらかにされております。平沢計七氏と与志は直接の交際はないままに、平沢氏の虐殺となつてしまったのですが、与志の演劇の道にとって平沢氏は忘れ得ない足跡を残した方で、その方を警察や軍

のテロルに奪われたことは、与志のその後の人生にも影響を与えたように思います。①

他方ベルリンに留学中の土方与志は、九月二日新聞報道で大地震を知った。その一カ月後復興しつつある祖国への復帰を決意し、モスクワを経てシベリア鉄道で大陸を横断する。途上ロシア革命七年後の首都では、新たなソビエト演劇にも接した。小山内薫と約束した劇団創立の構想を練り始めるのは、この旅路においてである。

大地震直後の祖国復帰（土方与志『演出者の道』）

一九二三年九月二日朝早くベルリンのホテルの一室に眠っていた私は、一枚の新聞を持って入って来たボーイに起こされた。ボーイは同情というよりも悔みに近い表情をして、持って来た新聞を渡した。いうまでもなくそこには前日の関東大震災のニュースが紙面をうずめていた。そこでは日本という島が太平洋に沈んでしまったかのように大げさに報ぜられていた。半年以上ヨーロッパ各地を演劇巡礼していた私はまず途方にくれた。

ちょうど一カ月目に、このまま勉強を続けようかどうか思っている私のところへ、二通の手紙が舞い込んだ。その一つは親戚の一人からので、震災によって東京の劇場がほとんど潰滅してしまった。だからそれ等の復興がなるまで、ゆっくりそっちで勉強している、と書いてあった。他の一通は数年来左団

① 土方梅子著『土方梅子自伝』早川書房、一九七六年。七六一七九頁。

次一座で親交を結んでいた河原崎長十郎からの手紙だった。彼はくわしく東京の劇場や劇団の消息を報告してくれた。「歌舞伎座の鉄骨、灼けて飴の如く」等という名文もまぎっていた。そして最後には、一日も早く帰って来て、東京の復興をいっしょにやろうというような事で結んであった。そこで私は、この二つの手紙を前に置いて迷ったが、結局河原崎の手紙に従って故郷―東京の演劇の復興に参加しようと決意した。

もうその時は日本の新聞等も手に入れる事が出来て、沢田正二郎氏が日比谷公園で野外劇を演じ、荒廃の中の市民の圧倒的な喜びとなったというような事も知ったし、また今まで色々な法律や条令で窮屈に縛られていた劇場建築に対する制約が緩和されて、バラック建ての劇場も許可される事も知った。そこで私がヨーロッパに出発する時に、小山内薫先生と帰国後は演劇研究機関を二人で作ろうという約束を思い出し、それをさらに拡大して、まず劇場を持った演劇・劇団活動を始めようと考えた。

まだ国交も開けていなかったソビエト同盟政府の、大震災をうけた日本の国民への同情と好意によって、幸い在外の日本人を最も帰国のための近道であるシベリア鉄道通過を特別に許可するという措置が取られた。私もこの特典を帰国の方法として選んだ。

第一次世界大戦終結、十月革命からわずかに数年後であり、近道といってもベルリンから日本まで一カ月もかかった。その途中シベリア鉄道に乗りつぐためには一週間もモスクワに滞在しなければならなかった。これはしかし、私にとってたいへん有難い事で、その間新しいソビエトの演劇に、また社会やソビエト人の生活に接する事が出来た。

この一カ月の旅行中、私はバラック劇場の設計や劇場の座組等に関して様々な想像を楽しみ、一応成案を作った。十二月の終わりに私はようやく神戸に着いた。その翌日すぐに大阪に住んでおられた小山内先生を

尋ね、帰国決意以来の私の構想を話した。①

帝国劇場で初舞台を踏みながら、ふたたび家業に戻った山本安英は、横浜で焼け出された実母と東京の山の手の文房具店を開く。その商売を実際には安英が担い、仕入れのため高円寺から浅草の間屋街へも頻繁に出かけた。小山内薫から呼ばれ、築地小劇場最初の女優となるのはその翌年である。

大地震直後の家業専念（山本安英『新版 歩いてきた道』）

大正という時代も未近くに起って、数日の間に東京の文化を焼きつくしてしまったこの大事件は、私一人の生涯にとっても、また意味深いものだったのです。日本の新劇のある意味では出発点である築地小劇場が起ったのはこの焼け跡からであり、そしてしあわせにも私はその運動に最初から加えて頂くことができたのでした。

その前に一寸私個人のことを申しますと、地震の時実母は二人の弟を連れて、東京の私の家へ遊びに来ていました。そして私の家は辛い災害をまぬがれましたけれども、実母達の横浜の家は、その貧しい家財もろともに一切が灰になってしまい、こうして母と弟達はまた新しい生活苦に直面しなければなりませんでした。母たちは養父の厚意から高円寺の駅のそばに小さな家を借りて、今度はささやかな文房具の店を出すように

① 土方与志著『演出者の道―土方与志演劇論集』未来社、一九六九年。一二一―一二二頁。

になりました。うちが近くなったので、私はしばしばこの高円寺の家を訪れ、時には養家の許しを得て数日泊まりこむようなことさえありました。弟たちは学校へ通っており、母は病身なので、結局私が店を引き受けたような気もちになって、一所けんめいに頭をしばって窓の飾りを工夫したり、商品の仕入れをしたりしました。私は小さい弟の手を引っぱっては浅草の方へ出かけ、あちこちと問屋さんの店を廻って、その年頃なりにせい一ぱい頭をひねるながら、鉛筆だとか帳面だとか筆箱だとかゴム消しだとか、そんなものを自分一人の率領で仕入れては、小さな体に大きなふろしきを背負って高円寺の家はかえってくるのでした。愛読していた樋口一葉に、私自身がなったような気になりました。筑地小劇場の話が起って、小山内、土方両先生から私がよばれたのは、このようにして日々を送っている時でした。①

東山千栄子の夫河野通一郎が属する原合名会社は、富岡製糸場等を傘下とする横浜の絹物輸出業であった。革命の余波によりロシアから撤退したあとも同社は発展を続け、河野はさらにニューヨークやリヨンの支店へと赴任する。他方千枝子は苦勞の多い海外生活を自重し、以後は日本の留守宅でながく生活した。子どもを持たぬ富裕な奥様として、種々の趣味にも手を伸べながら、無為と倦怠を感じる日々と自伝では回顧される。神奈川における紡績産業の壊滅をはじめ、関東一帯の惨禍に直面して、三三歳の彼女は文明や世事の空しさに慄然とし、この世で生きる意義を懸命に考え始めた。

① 山本安英著『新版 歩いてきた道』一九二〇頁。

帰国後の生活と日々の無為（東山千栄子著『新劇女優』）

ロシヤ革命の大正六年に日本へ帰って、それからここまでの六、七年間何をしていたかということになりますが、実はこの六、七年間は私にとって全くの空白であったような気がしております。それも自分の性格から来る一つの悲劇とでもいいましょうか、何事もなくて大変苦しかった時代です。主人は永年築いた働き場所を失って失意の中にあるといっても、やがて仏蘭西に行き、アメリカに行き、また静養のため帰国して本店詰めでおります時でも、文学的な持前と共にいつも青年のような強い研究心で、身分や年齢にかかわらず、大學に行つて学生の中に交つて講義を聴くことさえも出来る、そういう風でけつして退屈することなく、従つて時の動きのよく解る人としていつも重用されておりました。それで商人というよりも書斎人的な風格がありました。そういう理解の中にありながら何故か私は、なすことのなくて日を暮らしているが気にしていました・・・

モスコで全部を失つたといつても、日本に帰つて住む家に困るのでもなければ、明日の生活に心を碎くのでもありません。女中が何人もいて、子供のない家庭の仕事は、めいめいの分担がらくに済みますし、これは主人について外国に行つて暮したとしても同じこと、私はいよいよ平凡な有閑夫人で眠り込む外なかつただろうと思われます。とにかく仏蘭西へもアメリカへも主人は一人で行き、私は日本に残っていました。もしも無理に一緒に暮したとしたら、私の剛情が目立ち、主人のかんしゃくがつり、原因という程のものはなくていて、どちらも面白くない、一般に夫婦のこういう時期のことを倦怠期といっていますが、二人が

一致して打込む仕事のない悲哀、殊に一方がまるで手あきでいる状態では、余計に空虚が目立つのでした。

こんな風で表面は一応調うた生活をしながら、過ぎて行く月日をとらえる術もなく暮らしているところへあの大震災が見舞いました。下町の住居ではありませんから、直ぐに戸外にのがれて、身命に及ぶような被害は受けませんでしたけれども、瞬間に行われた帝都の大破壊の前に、私は初めて長い眠りの眼をさまされました。①

震災の衝撃と人生の転換（東山千栄子著『私の歩んだ人生』）

日本に帰ってから、主人はリヨンやニューヨークなど海外の勤務がやはり多かったのですが、私の方ほうも外国生活がいやになり、日本の留守宅に残つて、当時の流行語でいう有閑夫人の毎日を送っていました。とにかく退屈でたまりませんので、その倦怠と無為とをまぎらわすために、いろいろなおけいごとをしました。しかしどんなに精を出してみたところで、どれもこれも奥様芸以上に出ないことを、私は自覚せざるをえませんでした。

そこへ来たのが、大正十二年九月一日の関東大震災でした。思いもかけなかったこの突発的な天災で多数の人命があつて奪われ、家や施設が灰燼に帰してしまいました。その悲惨な現実に向ひて、私は人間とはなんとはかないものだろうということを、つくづく感じさせられました。そして、自分を省みたときに、愕然としました。

私はいったい何だったのでしょうか？　ただ生まれてきたから生きているというだけで、これではうじ虫の命と同じだと思いました。私のこれまでの生活は、あってもなくてもいいような、希望も理想もない、ほうとうにむだな、くだらない生活だったのです。子供ひとりない私は、子供を育て上げるという、大切な母親の義務を果たすこともできません。河野の家の両親もにすでに夜を去っていて、お世話をしてあげる人もおりません。生活費をかせぐこともなく。ただ主人に食べさせてもらっているのです。

自活できない、無力な女の生き方に私は疑問をいだきました。そして、なんとか勉強して、独立できるだけの教養を身につけねばならない、そこからほんとうの私が始まるのだと考えました。

私はそう決心してまず本を読みはじめました。それはいわが手当りしだいの、秩序のない乱読でしたが、とにかくこうして私は、なにかをつかまなければならないと決意したのでした。①

房総半島北条へしばらく転居した及川家では、避暑地での快適な自然と交遊によって娘道子の健康もかなり回復した。小学五年生の夏休みも明けて、帰京と登校の準備を始める九月一日、館山湾沿岸も激震と津波に襲われる。道子など子ども三人は倒壊する家屋の下敷きとなり、辛うじて知人に救出された。自伝『いばらの道』には苛烈な地震と避難の様相が、繊細な感性をとおし仔細に語られる。

① 東山千栄子著『私の歩んだ人生』二九―三〇頁。

房総で倒壊する家屋の下に（及川道子著『いばらの道』）

いよいよ今日から九月という日は、朝早く通り魔のようなひどい嵐があつて、それが過ぎた後は、また気味の悪い程のいいお天気になりました。お昼近く母は裏の井戸端でたらい一杯のお洗濯に忙しそでした。父は一等小さい弟の菊夫を抱いて、お守りをしながら庭を散歩していられました。和夫と冬生は奥の間で佐々木さんを相手に何かおもちゃをいじって遊んで居りました。そして、私と強子と従姉の浜ちゃんとの三人はお茶の間でおままごとに夢中でした。

そのお茶の間の窓近くには大きな橙の木がありまして、その実を取って遊んでいたのですが、丁度強子がそれを採ろうとして、手を伸ばした瞬間、不意に沖の方で雷の鳴るような音がしたかと思うと、いきなりミリミリ、バーンバーン、ガクガク！という物凄い響と共に、柱は折れ曲り、襖障子は弾け飛び、壁は崩れ落ち、家は今にも揉みつぶれるようで、畳はまるで波のように揺れうねり、棚の上のものは何一つ残らず転げ落ち、一瞬にしてあたりは言語に絶した修羅場と化していました。

私はとっさの場合に、日常父から地震の時はあわてて外へ出てはいけない、と教えられたことを思い出し、三人一塊となって、畳にうつ伏してしがみついていた。いえ、その場合出ようにも、どうしようにも、立つことはおろか、腹ばうことすら出来ないのです。・・・

そのうち震動が少し小止みになった隙を見て、佐々木さんに抱かれるようにして、弟達は戸外へ飛び出して行きました。これを見て私達もこの時だと思って、三人一緒に二、三步歩みかかった時、ああ何という恐ろしいことだったでしょう。前よりも一層物凄い地鳴りと共に、もっと激しい震動が襲って来たと思う間も

なく、倒れかかっていた柱、崩れ残っていた壁、そして落ちかかっていた天井が、この時とばかりに鋭い悲鳴をあげて、一時に私たちの上に覆いかぶさって来ました。手をひいていた妹を護ろうと、自分のからだを伏せた瞬間、どしりと重い板のようなものに抑え付けられたと思うと、そのままあたりは真暗闇になって、何も見えなくなっていました・・・

屋根、天井、柱と三重にも四重にも抑えつけられた私達を掘り出すには、とても父と佐々木さん二人の手に合わず、と云って隣近所どこでも皆同じように困っている時とて、手伝って貰うことも出来ず、氣ばかりあせて弱り抜いておられるとき、折良くいらつした高等師範の方々に手伝って貰って、先ず従妹、それから私と掘り出されましたが、最後の強子は大きな重い柱に片方の足を圧しつけられているので、これを引き出すのに随分手間取りました。その間強子が腹を千切られるような悲しい声をしばって「もうこれからいい子になりますから、助けてください！」と泣き叫んだあの有様がまだ目にみえるようです。

こうして幸いにも一同命に別條なく、顔を合わすことが出来て、庭の大きな橙の木の下に、寄り添ってホット一息ついていると、またしても大きな震動がやって来ました。薄気味悪い地鳴り、亀の甲形に裂けて行く地割れ、そこから噴き出す水、そしてあちこちに起る人畜の悲鳴―これこそ全くこの世の終りかと思われました。

この時父はつと立ち上り、泣き叫ぶ一同をおししずめながら、諄々とした非常時に処する態度を訓えたのち、両眼に涙を浮かべながら悲壮な声を張り上げて、「主よ　みもとに近づかん　のぼるみちは　十字架にありとも　など悲しむべきや　主よ　みもとに近づかん」と讚美歌を歌い出しました。そして、歌い終ると一同深いお祈りをいたしました。

このとっさの場合の、こうした父の落着き払った態度に、威圧と限りなき信頼を感じてか、付近の人々までも、私たちのまわりに寄り集まって来て、みな一様に鳴りをしづめて父の言葉に耳を傾けていました。

するとどこからともなく、津波が襲って来るかもしれない、という警報が伝って来ましたので、みんな山の方へ逃げなければならなくなりました。強子だけは足を柱で押しつぶされて、ひどい怪我をしてとても歩けませんので、米屋のリヤカアを借りて運びました。

山の上に来て見ますと、そこはすでに避難している人々で一杯でした。泣くもの、喚くもの、唸るもの、また傷けるもの、死せるもの―折柄後ろの森に沈もうとしている赤い夕陽にてらされて、それらの人々の姿は戦乱の巷もこうあろうかと惚ばれるほどでした。

ところが夜に入ってから、ここもまだ不安だと云うことになり、子供たちだけでもつと上に登って、そこにやっと落ちつきました。そして毛布を敷いて貰って休みましたが、いつ襲うかも知れない地震と津波に対する恐怖に加えて、折柄燃え続けていた隣村の山火事が、だんだんこちらにも移って来そうに見え、燃えさかる火を見ては、恐怖が募るばかりで、周囲はいつまでも騒々しさが止まず、殆ど眠ることも出来なませんでした。

それでも明け方少しは眠ったものと見え、朝眼を覚まして、何気なく上を仰ぎますと、そこにはいつもの天井の代りに低く覆いかぶさった松の枝の隙間から高い空が覗いていました。そして、丁度東の空には真紅な太陽がやっと上りきったところでありました。

隣りに寝ている強子ももう目を覚まして、繻帯を巻きつけた足を毛布の裾からのぞかせて、痛そうに顔をしかめながらも、心配そうに私の方を見守っています。私はふと寝返りを打とうとして、体を動かしますと、

胸のあたりがズキンズキン痛むので、恐るおそる手を触れて見ますと、いつの間にか繃帯が幾重にも胸に巻きつけられていました。―あとで知ったのですが、屋根の下敷きになったとき、肋骨を挫かれていたのを、寝ている間に手当されていたのです。

段々明るくなるにつれて、周囲に目をやると、右にも左にも、前にも後ろにも、頭や手や足を繃帯した怪我人や、むしろや布切れに包まれた死人が無数に転がっています。私はその惨状にゾツとしてしまいました。

その日のうちに、海岸にあったパーラーの天幕を持って来て、諏訪森の丘に小屋を建てて、その中に私たちは収容されて、こうして私たちの山の生活がはじまったのでした。

①

自由劇場第四回公演の一つとして戯曲『河内屋余兵衛』を抜擢された吉井勇は、本来『明星』にも寄稿した歌人であって、大正十年最初の歌集『酒ほがひ』を世に問うた。震災第二年の六月大阪ブラトン社により上梓された『夜の心』には震災を詠じた「業火余燼」二六首が収録される。なお、大地震の翌月刊行された雑誌『文章倶楽部』特別号（凶災の印象・東京の回想）には、白鳥省吾の詩「灰燼の中から」等とともに、「業火余燼」のうち十首が掲載される。

吉井勇「業火余燼」「夜の心」(『定本吉井勇全集』第一巻)

① 及川道子著『いばらの道』紀元書房、一九三五年。四四―五二頁。

何ごとの瞋^{いか}りかしらぬ地震ひぬ 天意え解かずをのきて居り
人死にぬ修羅道のごと人死にぬ かなしいかなや人の死ぬこと
うち日さす都もほろぶ時来ぬと 業火のまへにをのきて居り
地獄絵をまざまざと見て思へらく 現身はいとあはれなるかな
いまもなおほ目に残れるは焼あとの 芝香が墓の寒きまぼろし

人を焼く煙とともに雨は来ぬ 冬まだ来ぬに寒き雨かな
怖ろしき幾夜を重ね生きながら 地獄の道をたどらむとする
空遠く飛行機見えて天日は ものすさまじく落ちむとするも
夜もすがら絶えず聴こゆる地の声に ふるへをのくわが心かな
吾^{あこ}子は寝ぬわれは眠らで夜を守らむ この怖ろしき更けがたき夜を

そのむかし馬楽と見たる月に似し 月はあれどもすさまじき夜やめ
大地の瞋りとすればこころよし地震^{なみ}も畏れでかく云うや誰
生きながら黄泉^{よみ}のすがたをみるこゝろが いかに悲しきものとかは知る
酒甕の覆るさま目に見ゆと 無頼のこころ地震にほほ笑む
そのかみの別れに君と聴きしごと 地震の絶間に鳴ける虫かな

馬楽忌の酒に更けたるかへり路に 見し浅草の月に似る月
すさまじき夜ながら空にかかれるは 黄楊の櫛にも似たる月かな
大空の月いと細し夜ごとの 心細さに月も瘦せけむ

ありし日の銀座思ひて涙落つ 世に亡き人をしのぶここに
華やける人の末路を見るごとき あはれき覚ゆ今日の銀座は

わが胸も焦土となりぬいかにせむ 寂かなしと云う人も見ぬ

馬楽の忌小せんの忌など思ひつつ われ浅草の焼あとをゆく

浅草も焦土となれば焼あとの公孫樹も寒き秋なりしかな

源治店の路次もいまなし ありし日の人のおもかげいかにもとめむ

江戸名所図絵もほろびぬ わが夢も消えて空しと嘆けるや誰

うち日さす都のなかをたもとほり しみじみと知る現身の秋

①

大地震の五カ月前土蔵劇場での公演を無事果たした秋田雨雀は、七月初め有島武郎の葬儀に列したあと、月末

① 吉井勇著『夜の心』（『定本吉井勇全集』第一巻、四二―四一三頁。）

〔参照〕 吉井勇「業火余燼」『文章俱樂部』大正十二年十月特別号（凶災の印象・東京の回想）、三三頁。

東北への講演旅行に出発した。東京での大震災火災を知るのは九月二日青森においてである。丹念な『秋田雨雀日記』に八月二九日から九月一日までの執筆は欠如するが、以後数年間の絶えざる震災日誌はとくに貴重である。

震災日誌（『秋田雨雀日記』大正十二年）

九月二日 朝驚くべき報道に接した。大震と火災のために東京市全滅の報に接した。一日正午正十二時ごろ上下、水平の振動起り、大建築崩壊。十二階、ニコライ、三越、松坂屋など焼失。火は全市をなめつくしかかっている。―第一報をきき、老農社へ遊びに行く。―宿屋へ帰ると、第二報、第三報がきていた―戒厳令發布の報―自動車で魁へいき、回報をみて、枋内農学士の宅により、帰路再び魁に寄り、食糧略奪、抜剣の報を受け、自動車で土崎へ帰った。今夜こそ怖るべき夜だ。今夜は怖るべき夜になりはしないか？

九月三日 暴動化はしないか？東京の家族も心配になるので、足助君とわかれて、黒石へかえた。黒石では電報をみて、東京へ出発したものと思っていた。明日東京へ向って出発の用意をする。小坂、北岡、鳴海の諸君来訪。東京の模様について語った。

九月四日 東京市の八分まで全滅らしい。きょう黒石を出発。出発前に朝鮮の鄭鳳吉君が訪問してきたので、警察ではだいた問題にしているらしい。刑事が朝からつききりである。午後一時の汽車で出発。川部でそばをたべた。淡谷君の家へより、それから盛を訪ねた、水筒を淡谷家から借り、食糧をととのえて夜の急行に乗る。上京客で立錐の余地もない。宇都宮の参謀大尉と同乗。朝鮮人の流説の調査をきいて皆で笑った。しかし国民の軽率には驚く。沿道は戦闘気分だ。汽車が遅れて、赤羽に二時ごろついたので、小学校へ一泊。

九月五日 赤羽の小学校では教師が救護につとめていた。親切に応対してくれた。同行十人ほどテーブルの上に眠った。夜なかに一回地震があったので驚いてとびだして、時計のガラスを破った。はじめて大震後の東京へはいるしたくをした。自分の家のことなぞ心配しながら、池袋行の汽車に乗った。まるで戦争だ。

九月六日 午前中に雑司谷へつく。家は安全！食糧はいくぶん給与されていたが、全体として食糧欠乏、避難民は全部給与。比較的よく手廻しができていた。戒厳令―自警なぞでもものしい。朝鮮人虐殺は問題になるらしい。今日では反対宣伝をしているが、むずかしい問題になるらしい。妻も田中君も赤ん坊もみんな元気でいるので安心した。しかし、驚くべき損失は直接間接にぼくらに影響してくるだろう。・・・

九月十一日 朝鮮人問題につづいて社会主義者の検束の話がでている。小川君とぼくは検束されていることになっているのだそう。小川、藤森、生方の三君を誘い、前田河広一郎君の検束の話をきいた。自警団だ密告したらしい。藤森、小川君なぞが弁解して、取り返してきたそう。夜警。(大門会)・・・

九月二十六日 高木、松田の諸君が写真を撮ってくれた。(大杉君はリーブクネヒトと同じ運命にあった。)戒厳司令官福田大將交代。憲兵隊長罷免、甘粕憲兵大尉軍法会議廻附の事が理由不明のまま問題になっていたが、きょうはじめて発表された。甘粕憲兵大尉は平素社会主義に反感をもっていたが、大震後無秩序の状態で際し無政府主義の巨頭大杉らが不穏の行為にいずるを恐れて、大杉ほか二名を某所に連出して、銃殺したという犯罪分明にされたので、軍法会議の附せられることになったのだそう。大震に比較すべきほどの大事件だ！国民の無智は怖るべきことだ！清藤君大鰐から来た。(大杉君銃殺の報(大いなる損失)・・・

十一月十三日 『解放』の戯曲着想。二つほどえた。一、震災にヒントをえた、避難民を主材としたもの、一、牢獄と二つの窓。表現主義ふうのもの。このいずれかを創作してみよう。ずっと主観的なものでいい。

暁民会の川崎悦行君が市ヶ谷監獄で病死したという通知をうけた。立派な青年だった。仏教から生まれた社会思想家だ。二四才。不穩文書の件。午後高田保君に会い、ふたりで運天女史を中野に訪い、牛込でた。中野のカフェ・アザミによった。夜大門会にきたがあったのを仲裁した。・・・

十一月二十日 松本弘二君がきて『解放』が三月に延びたということをいつていった。戯曲は月末に脱稿することにした。『女性改造』の短い感想「わが子の行末を見守りて」のために短いものを送る。「子供は自然の子」とした。

十一月二三日 かなりな強震。いいあたたかい日。茅野家から死んだ娘さんのくやみの返しがきた。佐藤君がきたのでふたりで墓地のほうへ歩いていった。酔って憲兵隊につれていかれた話をしてた。おもしろい男だ。夜千代子をつれて東洋大学へいく。記念会で『国境の夜』をやっていた。校庭での屋台舞台。月光に照らされて五、六百人の人が見物していたのはおもしろい感じをあたえた。舞台装置は丸太小屋なのがよかった。グレゴリーの『月の出』もやった。千代子と二、三のカフェによって帰った。①

大地震の翌月雨雀も雑誌『文章倶楽部』に詩編「死の都」を掲載し、十一月には戯曲の執筆を再開した。②
着想されたのは青森へ逃れた被災者の苦境で、救護先における朝鮮人騒ぎを含み、表現主義による錯乱場面がフ

① 『秋田雨雀日記』第一巻、三二二―三二四、三三〇―三三一頁。

② 『文章倶楽部』大正十二年十月特号。三七頁。

イナ―レをなす。この脚本『骸骨の舞跳』は、翌年『演劇新潮』に発表され、関東大震災を主題にした文壇の代表作とされる。

避難先での不穏（秋田雨雀脚本『骸骨の舞跳』）

人物Ⅱ青年、老人、看護婦、医長、○○人、自警団員（後に骸骨）、貴婦人、避難民男女、其他

場所Ⅱ救護班のテント（立体派風の舞台装置を可とする。所謂マヴォ式の試みも面白いであろう）

老人　じき夜が明けましょうか？

青年　夜の明けるまではまだ二時間もありましょう。

老人　そうですね・・ああ何んてことでしょね・・こんな年になってこんな目に逢うなんて・・あれは何んの音でしょう？

青年　何でもありません、汽車の音です。あなたは何時ここへ降りたんですか？

老人　ゆうべです・・ゆうべ遅くです・・一体何んて話でしょうね・・こんなばかな話があるものでしょうか？

青年　東京でやっぱりひどい目にお逢いでしたか？お互に飛んでもない眼に逢いましたね。

老人　ひどい眼位じゃありません・・私は娘と孫に死なれてしまいました・・それに私は病身でして、そんな事をして旅なぞ出来る身体じゃないんですけれども・・

青年　然うですか、お気毒ですね・・そして娘さん達や孫さん達は何処で失くなったんですか？本所です

か？

老人　いえ、向島です・・私共は三十年向島に住んでいましたから・・何んでも近所の人の話では娘は孫をつれて土手に逃げていたのを、人に押されて大川へ落っこってしまっただそうです・・

青年　それはお気の毒なことをしましたね。あすこでは随分そんな人があつたそうですね。あなたはそれでよく逃げられましたね・・

老人　一層死んだ方がよかったんでしょう・・娘や孫に死なれて何が楽しみで生きて行かれますか？

青年　そう思いになるのも無理はありません・・でも世の中は生きていさえすれば、また何とかなりましょう・・いや実は僕自身もいまのところ何の光明もないんですが・・然し生きている間は生きていなければならぬんです・・

〔中略〕

看護婦　気分のお悪い方はありませんか？

避難者　看護婦さん、先生を呼んでくださいな・・お腹が痛んで仕方がないんです・・

避難者　看護婦さん、私に水を一杯ください・・

避難者　看護婦さん、この身体で船に乗れましょうか？・・

避難者　看護婦さん　この切符で只で船へ乗れましょうか？

看護婦　皆さん、静かにしてください。そう一度におしゃつちや何うすることもできません・・（老人に）

あなたは今夜船にお乗りになれますか？

老人　私はそれをあなたにお尋ねしたいんです・・もう少しここへ置いていただく訳に行かないでしょう

か?・・・何うも身体が痛んで仕方がないんです・

看護婦　そうですか?今先生がいらっしますから診察していただいたらよろしいでしょう。

〔中略〕

そのとき一団の自警団員がテントの中に入り込んで来る。甲冑を着て抜刀をした者に統率され、在郷軍人の服装をした者、陣羽織を着た者、鉢巻きをした者、学生服を着た者、各々手に槍刀剣類を携えている。

甲冑　看護婦さん・実は探し物があるんですが、一寸テントの中へ入れていただきます・

看護婦　そんなに入って来ちゃ困りますね。患者が寝ているんです。

鉢巻　一々断る必要ねえじゃねえか・さあ勝手に入って探そう・

看護婦　(唇をふるわせて) いけません・入っちゃいけません・

甲冑　看護婦さん、実はこのテントのなかに○○○○○○・現に汽車から降りるのを見た男がいます。

・○○○○○○

陣羽織　○○○○○○・市民の安寧のためです・鉢巻

在郷軍人　そうだ、市民の安寧のためだ

鉢巻　ぐずぐず言っていないで早く探そう・なんでもやつつけちまえ・

自警団員は提灯を振り廻して避難民の中を歩き廻る。看護婦は蒼白な顔をして一団の後を追うて行く。自警団員の一人は、老人と青年の背後に子犬のようにしゃがんでいる一人の男の周囲に立つ。

鉢巻　こいつだ!・・・こいつだ!・・・提灯を出せ・皆なこの顔付きを見ろよ・

ある男　(二四、五歳の労働者風の男) 僕は何もしないんです・

学生　(真似をする) 私はなにもしないんです・

陣羽織　やつつけちまえ・やつつけちまい!

甲冑　乱暴なことをするな・己れが今調べて見るからな・おい、○○○○?嘘を言っちゃ為にならな
いぞ・

ある男　僕は日本人です・皆さんはなにをするんです? ①

① 秋田雨雀著『骸骨の舞跳』叢文閣、一九二五年。三一二三頁。

〔参照〕「秋田雨雀と表現主義―秋田雨雀と関東大震災の戯曲」(大笹吉雄著『ドラマの精神史』新水社、

一九八三年。)